

…次つぎに月の神を生うみまつり、その光は彩うらわしく日にひにあげり。もつて日にひにあづけて治しらすべし

創月紀 ～ツクヨミ異聞～ 〈序の章〉

空の低いところを渡る風が、木々の葉という葉を撫でて、森全体がさやさやと笑った。これを不気味な音だと怖がる者もあるが、冴弓はこの音色がとても好きだ。

訪れた秋の風に、夏の暑さに色褪せた緑葉は紅や黄へとその色を変えていく。青々とした山が錦色へと衣替えをする短い季節が始まっていた。

森の中を細々と続く柚道を逸れ、腰まで届こうかという下草の叢むらに、冴弓は佇さゆんでいた。目を閉じ、森に響く音たちに耳を澄ませる。波のようにさざめく葉の音の奥からは、さまざまな音が冴弓のもとまで届く。虫の声や鳥の羽音、細い枝の折れて落ちる音に、降り積もった落ち葉の層を伝って土へ浸みる水の音。

冴弓のほかに人の気配はない。道しるべもない森の只中で、冴弓はたった一人だった。

冴弓の住む里は、森の奥深くにある。大人子供合わせて二十人足らずの小さな里で、冴弓は生まれたこの方、里の者以外の人に会ったことがない。生まれてからずっと、この森の中で過ごししてきた。冴弓にとって、この森のすべては勝手知ったる庭も同然だった。

大人たちは森の危険を口を尖らせて説き、冴弓のような子供が一人で森の中を歩くことを戒めるが、冴弓はそれでも時折ふらりと里を抜け出しては、一人でぼんやりと時を過ごす。それでも初めこそは里の近場で過ごしていたのだが、それでは大人たちがすぐに連れ戻しに来てしまう。それが嫌で、次第に遠くへ遠くへ足を延ばすようになっていた。

里に不満があるわけではなかったが、常に誰かがそばに居るのでは、やはり息が詰まる。今日も冴弓は、子供たちの輪からするりと抜け出し、森の中をあてどなく歩いていく。

ひとしきり森の笑声しょうせいに耳を傾けた冴弓は、やがてゆるゆると目を開けた。身を寄せ合って揺れる枝葉の向こうに、西へと傾く太陽が垣間見えた。そろそろ戻らなければならない刻限だ。日暮れが近づけば狼や虎が起き出してくる。彼らに見つかる前に、村を守る篝火の内側へ入ることだけは、冴弓も必ず守っている決まり事だった。

冴弓は柚道のほうへ戻るため、草叢を泳ぐように掻き分けて歩き出した。

そのとき、少し強い風が一陣、冴弓の右頬に荒く触れながら駆け去っていった。その風に混じった違和感に、冴弓ははっとして足を止める。

(なんだ……?)

ほんの僅かだが、風の中に馬の嘶きが聞こえた気がしたのだ。

冴弓は立ち止まったまま、風の来たほうへ向かってじっと耳を澄ます。しかし、馬の嘶きはそれきりもう聞こえなかった。気のせいかとも思ったが、空耳で馬の嘶きが聞こえることなどあるだろうか。

この森に野生の馬はいない。馬は平地の生き物だ。里の者たちも、山道の苦手な馬ではなく鹿を飼う。馬がいるということ、よそから人が入った証左なのだ。大人たちは言っていた。

そして、よそ者がこんな森の奥深くまで立ち入ることは、普通ならばあり得ない。冴弓たちの住む里は、よそから人が迷い

込むことさえ難しい場所なのだ。

冴弓は慎重に歩みを再開し、回り道をして柚道に見える小高い丘に登り、茂みに身を潜めた。

息を静めてじっと道を見守っていると、果たして降り積もった落ち葉を踏みしめる足音がいくつも聞こえてきた。次いで、人の話し声。だんだん近づいてきている。

男の声ばかりが四つ、五つ、六つ。潜み声で話してはいるようだが、こんな森の中に人はいないと高を括っているのだろう、その声は冴弓のもとまではっきりと聞こえる。足音に合わせてかちやかちやと鳴る音は太刀の金具の音だろうか。

やがてその一行が、冴弓の視界の端からゆっくりと歩いて来た。馬が一頭に男が五人、馬上に人はなく全員が徒歩だ。五人全員が太刀を履き、軽い武装をしている。街道からはかけ離れた山の道だというのに、彼らは迷ったふうもなく堂々と歩いていく。それで冴弓は確信した。

(里へ向かう気だ！)

一刻も早く里へ駆け戻って知らせなければ。冴弓は身を潜めていた茂みから立ち上がり、来た道に戻ろうと振り返った。

「！」

「なっ……！！」

そこに、人影が立っていた。

目が合ったのは一瞬だった。冴弓が驚き立ち尽くす目の前で、人影もまた驚いたように喉から声を漏らす。ほんの一呼吸のあいだの邂逅だった。それと同時に、視界の上のほうを棒状の影が素早く走り抜け、次いで冴弓は額の真ん中に鋭い衝撃を感じた。衝撃は頭の中を揺さぶって後頭部へ抜けていく。見えていたはずの視界は、あつという間に黒く覆われてしまった。地面の感覚が遠ざかる。

冴弓が覚えているのは、そこまでだった。

○ ○ ○

「冴弓、見てみなさい」

縁側に腰掛けて俯いていると、横に座った父が言った。その手が、上のほうを指し示している。冴弓はその指先を追って顔を上げた。気が付けば空には、白々と輝く真円の月が登り、昼と見まがうほどの光で夜を照らし出している。

冴弓は静かに息を呑んだ。本当に、美しい満月だった。

父について、冴弓の知っていることはそれほど多くない。冴弓の身近にいる唯一の肉親であったけれど、子供の冴弓にとつて、父はどこか近づきたい雰囲気を纏っていた。

父の人柄には、厳格、の一言が相応しい。それは実の子である冴弓に対しても同じで、冴弓は父の顔が笑ったり泣いたりするのを、ついぞ見たことがない。常にどこか怒ったような厳めしい表情をしている。

父は里の中心となつて皆を導く役割を担い、そんな父を、里の皆はとても慕い敬っていた。

冴弓の家には今、母がいない。少し前に、冴弓の弟を連れて母親は里を出ている。不仲で別れたとかそういうのではなかつたように思う。父と母が向かい合つて正座し、父の横には冴弓、母の横には弟が付き、二人は厳かに言葉を交わし、それから母が弟の手を取つて立ち上がり、出て行つた。そのとき母は冴弓にもなにかを言ったのだらうと思うが、覚えていない。出て

いく二人を、冴弓は父に命じられて深々と頭を下げて見送った。以来、冴弓に母はいない。

「お役目にお出になられた」と里の者は冴弓に説明した。母がいなくなつてからは、里の大人たち皆が冴弓の母親代わりだつた。

里の者たちは、冴弓に対しても父と同じように必ず頭を下げてから接し、目上に対するような敬い言葉を使った。いつとき、それが嫌になつてやめて欲しいと頼んでみたことがあるが、「できません」の一点張りで、理由を訊いても、「あなたは特別だから」と、よく分からない答えではぐらかされてしまった。里の者たちは冴弓に対して丁寧な言動は取つたが、ほかの子供と比べて鼻肩をするようなこともなかったのだ。冴弓もやがて気にならなくなつてこの件は落着いたので。

厳格な父は、冴弓を叱ることも往々にしてあつた。

その夜も、子供同士での喧嘩事が原因で、冴弓は自宅で父の説教を受けた。激して怒鳴つたり殴つたりというような叱り方ではない。ただ言葉で滔々とうとうと説く。

父が空を指差したのは、説教が終わつて沈黙が降りた先のことだつた。

そして、厳かな声で冴弓に告げる。

「取り戻せ」と。

声に釣られて父のほうを見上げて、冴弓は驚きに目を見開いた。月明かりを受けた父の顔、皺の目立ち始めたその頬を、月光に白く輝く涙が伝つていたのだ。冴弓にとつて初めて見る、父の涙だつた。

見ているいけないものを見てしまった気がして、冴弓は慌てて月へと視線を戻した。

「取り戻せ」

父がもう一度言った。呻くように言う。まるで心の奥底から想いを絞り出してきたような、静かながらに重い声音で。

冴弓には、それがいったいなにを指して言われた言葉なのか、今も分からない。ただそのときは、なんとなく月のことを言っているのだろうと感じて、父と共に空をじっと見上げていた。

常ならば暗闇の覆う夜を、明るく照らす月は、まるで闇に潜むすべてを暴き出そうとしているような、凄絶さすら思わせる名月だった。

以来、満月の明るい晩に空を見上げるたびに、冴弓の中で父の声が蘇る。

「取り戻せ」と。

○ ○ ○

目が覚めると同時に飛び起きて、殴られたような激しい頭痛に思わず喉の奥から呻き声が漏れた。目を開けていられない痛みをどうにかやり過ごそうと、頭を抱える両手に力が籠もる。

「……おい、大丈夫か？」

頭上から男の声がした。間近にしゃがみ込む気配がして、誰かの手が冴弓の手に添えられる。冴弓の手をすっぽり包むほどに大きく、固い皮膚をした掌だ。

「急に起きたから頭がびっくりしているんだ。すぐに治まる」

創月紀 ～ツクヨミ異聞～ <序の章>

(そうげつき つくよみいぶん ついでのしょう)

© 2014 とや(toya) / さらてり-solitary-

発行日 2014年6月29日

(そうさく畑収穫祭2014夏にて)

発行者 とや (さらてり -solitary-)

連作先 Web URL <http://solitary.jakou.com/0720/>

Mail nephrites@gmail.com

Twitter ID [toya_solitary](#)

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

お手数ですが、発行者連絡先のいずれかへお知らせください。

感想お待ちしております！